

企画展

柏木御厨 と 山中氏

—水利が刻む中世の歴史と景観—



甲賀市教育委員会 / 神奈川県立歴史博物館

企画展

柏木御厨と山中氏 ―水利が刻む中世の歴史と景観―

会期 2026年1月21日(水)～3月8日(日)

会場 甲賀市水口歴史民俗資料館

主催 甲賀市教育委員会

共催 神奈川県立歴史博物館

謝 辞

本展開催にあたり、多大なるご協力を賜りました関係各位に感謝いたします。(五十音順・敬称略)

柏木神社 水口城資料館 野洲川土地改良区(水土里ネット野洲川)

植区 宇川区 宇田区 酒人区

井上 武彦 鵜飼 爽一郎 奥村 正 上村 喜秋 川島 雅親 城 平八郎 小林 伊佐治 澤田 勉
寺村 和久 西川 治 西川 重義 西川 満 福西 仁志 藤田 利昭 山崎 征夫 山田 喜一朗

凡 例

- 一、本書は2026年1月21日から3月8日まで甲賀市水口歴史民俗資料館で開催する企画展「柏木御厨と山中氏―水利が刻む中世の歴史と景観―」の展示図録である。
- 一、本書の図版番号は展覧会場での資料番号と一致するが、展示の順序とは必ずしも一致しない。また、編集の都合上、すべての図版は掲載していない。
- 一、文化財指定略記号は、□市町指定文化財として表示した。
- 一、資料名は原則として所蔵者の表記や一般に認知される表記に従ったが、語句の統一を図るため、一部改めたものもある。
- 一、本展覧会は、渡邊浩貴(神奈川県立歴史博物館 学芸員)が企画し、甲賀市教育委員会が補佐した。
- 一、本書は渡邊浩貴が執筆した。
- 一、本書表紙およびデザインは渡辺ゆき(デザイナー)が行った。
- 一、本書掲載の写真は、関係機関から提供を受けたもののほか、執筆者撮影のものをを用いた。
- 一、本書の編集は、渡邊浩貴が行った。
- 一、本書は以下の研究成果の一部である。
 - ・科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 24K04220「水利資料群の研究資源化による中世～現代荘園地域の社会構造研究」(研究代表者：渡邊浩貴)
 - ・公益財団法人河川財団 令和6年度河川基金助成事業「野洲川流域における地域的用水秩序と水利組織の形成に関する歴史学的研究」(研究代表者：渡邊浩貴)

発行年月日 令和8年(2026)1月21日

編集・発行 神奈川県立歴史博物館

住 所 〒231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通 5-60

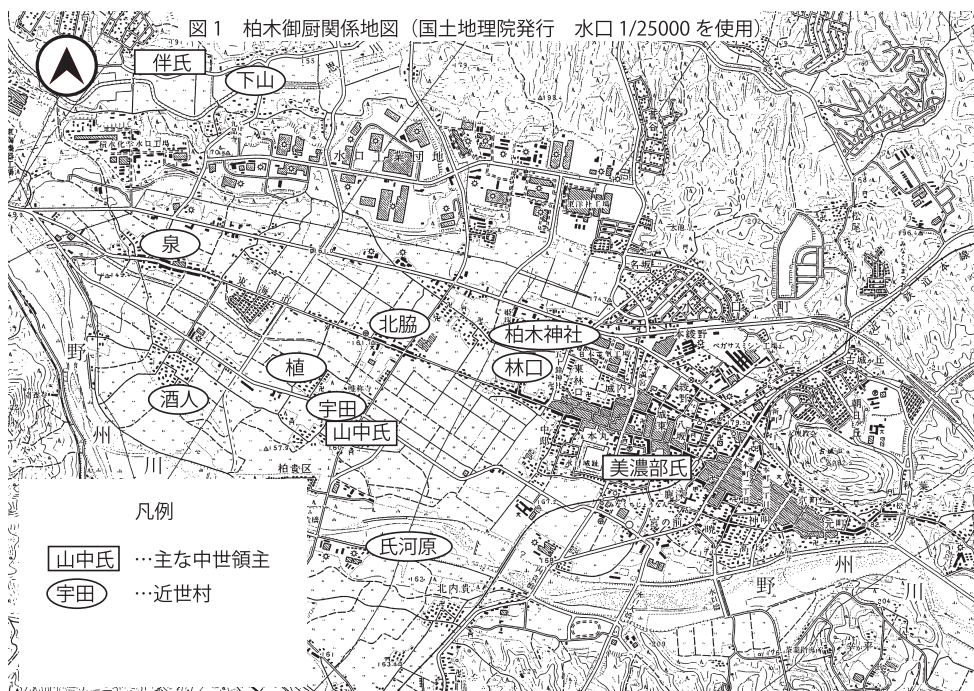
電 話 045-201-0926

印 刷 株式会社 TAKT-JAPAN

1章 山中氏たちの城館

滋賀県甲賀市水口町は、かつて中世の時代に形成された伊勢神宮領柏木御厨の荘園故地として、今もその景観を濃厚にとどめている。荘園の領域は、柏木本郷（近世村の宇田・林口・北脇・名坂・松尾）と酒人郷（近世村の植・酒人・泉）、野洲川氾濫原の沖積低地内にある宇治河原保（近世村の氏河原）、また地理的にやや離れた北部中山間地域の上山村郷（近世村の上山）・中山村郷（近世村の中山）・下山村郷（近世村の下山）からなる。

当地には山中氏や伴氏・美濃部氏などの武士が拠点を置いて領主支配を展開した。鎌倉期の宇田区・植区には柏木御厨の荘官・名主層の橘姓宇田氏と、その庶流とされる溝端氏が拠点を置いた。また、同時期に鈴鹿関山中村や柏木御厨上山村を拠点とする鎌倉御家人の平姓山中氏も存在しており、南北朝期に先の橘姓宇田道俊と溝端為顕が平姓山中氏俊の養子となることで、山中村の権益を継承して御家人身分を獲得していく。この道俊と為顕の二系統の系譜をもって、二つの家が並び立つ南北朝期山中氏の両惣領家が登場することとなる。嫡流にあたる道俊の系統が宇田区の伝山中氏屋敷跡（南北朝期では「宇田屋敷」として登場）を、庶流にあたる為顕の系統が宇田区内の小字「溝端」を拠点化していく。



残念ながら、伝山中氏屋敷跡やその周辺地域に、鎌倉・南北朝期における武士の動向を直接伝える考古遺物・遺構は確認されていない。しかし野洲川を挟んだ対岸にある貴生川遺跡（甲賀市水口町貴生川）には溝で四方を囲まれた鎌倉時代（13世紀前半～中頃）の方形居館がみつかり、戦国時代の城館にも接続する。戦国時代の1魚形水滴（番号は出品リスト番号、以下同）や、大溝からは鎌倉時代の3三筋壺や7羽釜が出土している。館の北西にある木棺墓には平安時代にさかのぼる4中国製白磁と手づくね製の6土器が出土しており、聖なる墓域として整備されていたことがわかる。とくに4中国製白磁や5中国製青磁といった貿易陶磁と2古瀬戸水注は高級品である

図2-1 貴生川遺跡出土の中世資料



ため、中世の武家社会で威信財として機能していたことが知られる。貴生川遺跡の地に、それなりに高度な文化レベルを持つ武士がいたことが想定されよう。同遺跡の居館は、これまで戦国期に登場する内貴氏との関わりが想定されているが、同遺跡のある北内貴村はかつて美濃部郷（水口郷）の本郷（荘園支配の拠点などが設置された地）とされ、蔵田荘の領域に属する（「北内貴川田神社文書」）。美濃部郷の中核拠点としての性格が見出せるのならば、貴生川遺跡の居館は美濃部氏のものである可能性も出てこようか。現在、美濃部氏の本拠は水口城下町の水口美濃部村付近に比定されているが、鎌倉時代においては野洲川対岸の北内貴周辺との関わりも視野に入れて検討する必要がある。

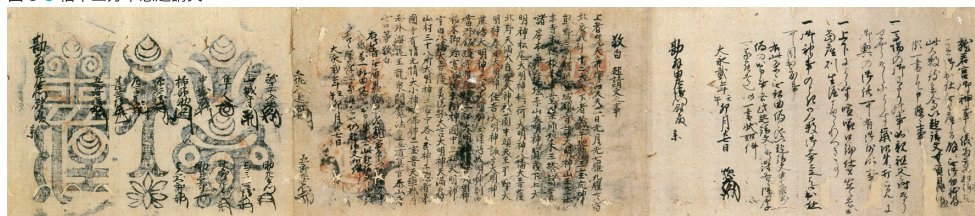
図2-2 1 魚形水滴



図2-3 2 古瀬戸水注



図3 9 柏木三方中惣起請文



戦国期になると、先の山中氏・伴氏・美濃部氏らは同名中・三方中・郡中惣と呼ばれる領主層で構成される地域組織体を形成し紛争などの解決にあたっていた。9 柏木三方中惣起請文では若宮（柏木神社）の神事について、例えば第一条にて「馬場の御わたりの事、如親・祖父之時、そうりやう（惣領）・そし（庶子）によらす、歳次第二打こみに御輿の御供可有御沙汰事」と、親・祖父の代から神輿巡行の御供において惣領・庶子の別なく対等な関係だったことが確認され、一族間の紛争裁定が決められている。もともと山中氏是一族の中で「同名中」を形成して掟の制定や領主裁判権を行使し、さらに下山郷の伴氏、蔵田荘の美濃部氏とともに、個別領主の枠組みを超えた「三方」という在地組織を形成していく。ちなみに9については、山中氏・伴氏・美濃部氏が結びついた「三方」の誓約とみるか、あくまで山中一族内の「同名中」とみるかで先学の見解に相違がみられる。戦国末期になると、郡レベルでの広域的な結合が生まれ、「甲賀郡中惣」が創られていくこととなる。

図4 空からみた伝山中氏屋敷跡と植城跡



2章 一ノ井・二ノ井の形成

柏木御厨と山中一族の本拠では、野洲川から取水される「一ノ井」「二ノ井」という二筋の幹線用水路がすでに鎌倉時代に存在し、前者は北脇村・林口村・泉村を、後者は宇田村・植村・酒人村を灌漑したことが村田修三によって明らかにされている（『用水支配と小領主連合』『中部大名の研究』吉川弘文館、1983年（初出1973年））。暴れ川の野洲川では、県営事業として河川改修やダム・頭首工の建設が着手されていき、基幹水利施設である野洲川ダム・石部頭首工・水口頭首工は国営野洲川土地改良事業（昭和22年度～昭和30年度）で造成され、その後、国営造成土地改良施設整備事業（昭和49年度～昭和53年度）により施設改修工事が実施された。また国営野洲川沿岸土地改良事業（農地防災）の計画確定が平成12年にされ、一連の土地改良事業は平成18年度で完了して、かつての水田景観は消失してしまった。野洲川の二箇所からそれぞれ別に取水された「一ノ井」「二ノ井」の用水路も、現在は水口頭首工から水柏用水幹線水路・柏木支線水路・貴生川支線水路の三つが引かれ、柏木御厨故地主要部を灌漑する「一ノ井」は幹線用水路と取水口を残すものの、「二ノ井」は一部の用水路だけを残して取水口を失っている。圃場整備以前の用水体系は、大正・昭和時代頃に作成された 10 栗太・野洲・甲賀三郡水利調査図に詳しく記載されている。

「一ノ井」「二ノ井」の用水体系は、12 元和八年（1622）六月四日「乍恐申上」の申状のなかで、「一、あやの井と申て上下二大成井溝式ッ御座候」とあるのが確実な初見で、「一ノ井」「二ノ井」は現在も「あやの井」（綾野井）と総称される。

図 5-1 野洲川対岸からみた水口頭首工



図 5-2 現在の一ノ井・二ノ井が分岐する五十鈴分水



図 6 10 栗太・野洲・甲賀三郡水利調査図(部分)



文安五年（1448）九月十一日「室町幕府將軍家御教書案」（「山中文書」）に「酒人用水」とあるため、中世に用水路が存在していたことは確実であろう。ただし、村田が圃場整備以前の景観復原を通じて想定した、取水口を二つ持つ「一ノ井」「二ノ井」の二筋の用水体系がそのまま中世、とくに鎌倉時代にさかのぼるのかは再検討が必要である。寛文十三年（1673）に作成された **13** 一ノ井・二ノ井水論内済絵図には「二ノ井」の開削が記されており（「二ノ井」の初見史料でもある）、これは「水口新開之井水」（**14** 取替証文）とされた。つまり、二ノ井開削以前は **12** にある通り、野洲川から取水する「あやの井」（後に「一ノ井」と呼ばれる）が存在し、その用水が分岐して「上下二大成井溝式ツ」を形成したと考えられるのである。その証拠に、天

図7 **12** 乍恐申上（部分）

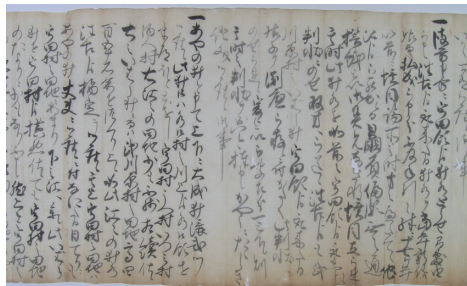
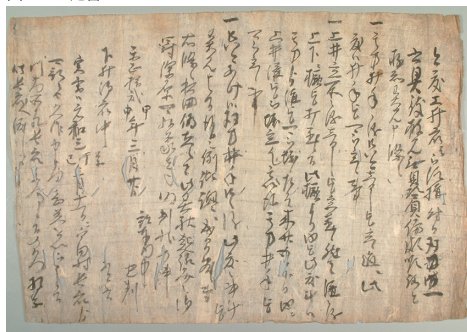


図8 **11** 定書



正十二年（1584）の年紀を持ち、甲賀郡中惣による紛争裁定が行われた **11** 定書には、「上井衆」と「下井衆」の水論があったことがわかる。上井衆・下井衆とは「上下二大成井溝式ツ」に対応した戦国末期の水利組織だったのだろう。中世の柏木御厨は、野洲川から取水する「あやの井」という基幹用水路を中心とし、その用水が分岐して灌漑していたのである。取水口を一つとする「あやの井」が柏木御厨の存立にとってきわめて重要な水資源供給地であるとともに、果たして野洲川からの水量だけで荘園全体の開発をカバーできたのかどうか疑問も残る。そういえば、1章にて美濃部氏のもともとの本拠地が野洲川対岸の北内貴村にあり、その後に水口美濃部村周辺へ進出した可能性を述べた。文安五年（1448）に美濃部氏が「柏木郷用水」「柏木郷内河原・同酒人用水」に対して新儀の井堰を設置して相論となった出来事は（「山中文書」）、もともと当該地に權益を有していない後発の美濃部氏が新たな水利権を主張した結果、惹起された用水相論と再評価できるのかもしれない。美濃部氏の動向を含め、中世「あやの井」の全貌解明を今後も継続して行っていきたい。

水田景観は消失してしまっても、かつての水利慣行はかたちを変えながら根強く現地に息づいている。「一ノ井」・「二ノ井」の受益村は、毎年四月の第二日曜日に五十鈴分水にて水戸口祭を催し、その後に旧二ノ井の水利組織「あやノ井」（宇田・植・酒人）では四月中に立込立会（タテコミリッカイ）を行って分水量を取り決め、田んぼに通水する。

現在は直会（ナオライ）だけとなっているが早苗振祭（サナブリサイ）も六月に行われた。これらの行事は、植区が所蔵する 15 横井堀井雨乞目録之掟によると、近世末期に五月六日「井立」、同月八日「植出し」、同月二十四日に「早苗織（振カ）」との行事がみえ、現在の慣行に極めて近いことがうかがえる。

コラム①

「あやの井」（綾野井）の由来

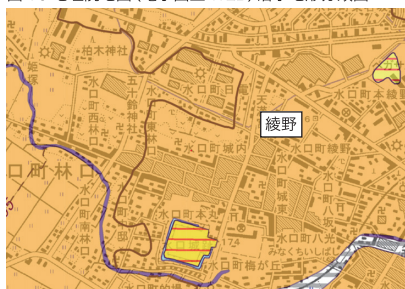
柏木御厨故地のうち本郷・酒人郷を灌漑する基幹用水路「一ノ井」「二ノ井」は、近世の時期に「あやの井」（綾野井）と総称され、今も旧二ノ井の受益村である宇田区・植区・酒人区の三集落が属する水利組織を「あやノ井」と呼ぶ。「綾野」の名称は甲賀市水口町の字名として今も残り、古城山西麓から北脇区の柏木神社までの一帯を指すようで、中世では永禄十二年（1569）六月十二日「上山村四郎右衛門為高畠売券」（「山中文書」）に「甲賀上郡柏木郷林口村字綾野」とみえる。だが、そもそもなぜ一字名に過ぎない「綾野」が「一ノ井」「二ノ井」の総称として用いられたのだろうか。

その謎を解くヒントは「綾」という漢字にありそうだ。例えば、民間信仰に現れる「綾の神」が水神の性格を持つという指摘を踏まえるに（佐野正晴「長浜市余呉町文室の綾の神」『淡海文化財論叢』16、2024年）、水利との関わりも想像されよう。試みに『大漢和辞典』で「綾」の項目を引いてみると、「平らかでないさま」とあり、旁（つくり）の部首「夂」には「高い地」という意味がある（『説文解字』）。実際に字「綾野」にある綾野天満宮から西側の五十鈴神社・柏木神社へ向かって歩いてみると、緩やかではあるが谷地形になって落ちていく（図9）。これを地理院地図（電子国土WEB）の治水地形分類図で確認すると、ちょうど綾野あたりに小さな谷が存在していた（図10）。「綾」とは崖や谷の地形を指す地名の可能性が高い。野洲川から取水する「一ノ井」「二ノ井」の基幹用水は、字「綾野」を含む水口城趾のある段丘面の崖下を地形に沿って流れていく。「あやの井」（綾野井）の「綾」とは、こうした自然地形が織りなす高低差によって規定された用水系統の様相を示しているのかもしれない。

図9 綾野天満宮から緩やかに傾斜していく道路



図10 地理院地図（電子国土WEB）治水地形分類図



3章 湧水のある暮らし

二ノ井が開削される以前の柏木御厨の水資源開発において、野洲川からの河川による灌漑以外にも豊富な水資源利用がみられた。再び 10 栗太・野洲・甲賀三郡水利調査図をみると、「一ノ井」「二ノ井」以外にも、水口城址が立地する段丘面では名坂村・林口村の開発が「大池」「西之池」「菖蒲」といった溜池による灌漑だったこと、そして植村・宇田村周辺には「清水井」という湧水による灌漑があったことが確認できる。中世の柏木御厨は、河川灌漑だけでなく、溜池や湧水といったさまざまな灌漑の複合によって成り立っていたことが想定できよう。

「一ノ井」「二ノ井」の水利慣行を濃厚に残す宇田区・植区・酒人区でも、豊富な湧水が存在していた。16 宇田村字地全図によると、伝山中氏屋敷跡付近に小字「清水」という湧水点が見える。これは現在も湧水の場所として残る。聞き取り調査によると、この湧水点はさらに「グルリ」と地元で呼ばれる井溝によって伝山中氏屋敷跡を灌漑し、その後に集落内を流れてから段丘崖下の「二ノ井」に落ちて酒人区へ流れていく。その他にも小字「澤」や小字「中頃」でも湧水点が確認でき、人々にとって湧水とそれによる水資源開発が身近な存在だったことがうかがえる。

図 11 10 栗太・野洲・甲賀三郡水利調査図(部分、薄緑色の箇所が溜池灌漑の範囲)



柏木御厨には山中氏をはじめ伴氏や美濃部氏など様々な武士勢力が本拠を形成していた。これらの領主拠点がすべて「あやの井」という野洲川取水の河川灌漑だけで一様にまかなわれていたとは想定し難い。むしろ個々の拠点のなかで湧水を基盤とする水資源開発をベースとしつつ、河川灌漑・溜池灌漑といった複合的な水資源利用があったと考えられる。「同名中」「三方」さらには「甲賀郡中惣」といった武士たちによる横の連帯は、各武士の本拠および城館において自律的な存立が果たされていたからこそ達成できたのではないかと。1章で触れた山中氏惣領家は、それぞれ自律しながらも現地景観でみるとあまりにも近接して本拠（宇田村と植村）が形成されていることに気がつく。各武士たちの自律的な基盤形成の根底には、こうした湧水開発があったのではないだろうか。豊富な湧水に恵まれた柏木御厨故地を歩きながら、そうした思いを一層強くする。

図 15-1 みどろの沢の故地①



図 15-2 みどろの沢の故地②



コラム②

「ジンズイ」する村の寄合

近世文書に登場する水利慣行が現代でも息づいているように、村のさまざまな慣行もまた濃厚に現代へと継承されている。宇田区では毎年八月末頃に「ジンズイ」（「神随」の漢字を当てる）と呼ばれる村中総出による会合が催され、上半期の村内会計報告会という性格を帯びる。昔は半日がかりの会合だったようで、この会合に参加する時点ですでに報告内容に同意していることを意味しているのだという。

「ジンズイ」という言葉から、かつて中世人が約束に違背しない旨を神仏の前で誓った掟書・起請文を焼き、その灰を入れて神水を飲んだ「一味神水」が想起される。実際、寛永十四年（1637）六月二十六日「乍恐申上候」（「宇田若党講文書」）には「毎年八月以前ニ地下中置目之神水をたべ申時」と記され、毎年掟書などを作成し、その内容の遵守を誓約して一味神水したことがうかがえる。現在も催される「ジンズイ」とは、まさに一味神水の行事だったのである。

出品リスト

※指定品記号は以下を用いる：□市区町村指定文化財

No.	指定	遺跡名・資料群名	名称	員数	時代	所蔵者・所蔵機関
-----	----	----------	----	----	----	----------

1章 山中氏たちの城館

1		貴生川遺跡出土	魚形水滴	1点	戦国時代	滋賀 甲賀市教育委員会
2		貴生川遺跡出土	古瀬戸水注	1点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
3		貴生川遺跡出土	三筋壺	1点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
4		貴生川遺跡出土	中国製白磁	1点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
5		貴生川遺跡出土	中国製青磁	3点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
6		貴生川遺跡出土	土器	8点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
7		貴生川遺跡出土	羽釜	1点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
8		貴生川遺跡出土	漆器椀	1点	鎌倉時代	滋賀 甲賀市教育委員会
9		柏木神社文書	柏木三方中惣起請文	1通	大永2年(1522)	滋賀 柏木神社

2章 一ノ井・二ノ井の形成

10			栗太・野洲・甲賀三郡水利調査図	1幅	大正・昭和時代	滋賀 野洲川土地改良区(水土里ネット野洲川)
11		宇田若党講文書	定書(上井衆と下井衆の水論につき)	1通	天正12年(1584)	滋賀 宇田若党講旧蔵
12-1	□	宇川共有文書	乍恐申上(宇治河原村と宇田村の水論につき)	1通	元和8年(1622)	滋賀 甲賀市水口町宇川区
12-2	□	宇川共有文書	乍恐申上(宇治河原村と宇田村の水論につき)	1通	元和8年(1622)	滋賀 甲賀市水口町宇川区
12-3	□	宇川共有文書	目安跡書(宇田村のいはら井破壊について)	1通	元和8年(1622)	滋賀 甲賀市水口町宇川区
13		酒人区有文書	一ノ井・二ノ井水論内済絵図	1枚	寛文13年(1673)	滋賀 甲賀市水口町酒人区
14		宇田区有文書	取替証文(水口新聞の井水争論につき)	2通	延宝2年(1674)	滋賀 甲賀市水口町宇田区
15		植区有文書	横井堀并雨乞目録之掟	1冊	嘉永6年(1853)	滋賀 甲賀市水口町植区

3章 湧水のある暮らし

16		宇田区有文書	宇田村字地全図	1枚	明治6年(1873)	滋賀 甲賀市水口町宇田区
17		植区有文書	立合絵図(酒人村と植村の水論につき)	1枚	寛政13年(1801)	滋賀 甲賀市水口町植区
18		植区有文書	諸書(酒人村と植村の水論につき)	1通	享和3年(1803)	滋賀 甲賀市水口町植区

主要参考文献

石田晴男『中世山中氏と甲賀郡中惣』（同成社、2021年）

久留島典子「中世後期在地領主層の一動向」（『歴史学研究』497、1981年）

久留島典子「甲賀山中氏に関する二・三の問題」（佐藤和彦編『中世の内乱と社会』東京堂出版、2007年）

佐野正晴「長浜市余呉町文室の綾の神」（『淡海文化財論叢』16、2024年）

福島金治「近江柏木御厨と金沢北条氏・山中氏」（鎌倉遺文研究会編『鎌倉時代の政治と経済』東京堂出版、1999年）

藤田和敏『近世郷村の研究』（吉川弘文館、2013年）

村田修三「用水支配と小領主連合」（秋澤繁ほか編『戦国大名論集4 中部大名の研究』吉川弘文館、1983年（初出1973年））

渡邊浩貴「圃場整備地域の景観復原技法確立と地域実践—滋賀県甲賀市水口町の前近代水資源開発と社会集団の関わりから—」（『学術研究助成報告書』6、公益財団法人国土地理協会、2021年（初出2019年））

渡邊浩貴「湧水は中世景観を語るのか—滋賀県甲賀市水口町の現地調査と山中氏兩惣領家—」（『民衆史研究』101、2021年）

渡邊浩貴「近世村落の湧水紛争と水資源開発—近江国甲賀郡柏木御厨故地の水論絵図から—」（『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』48、2022年）

渡邊浩貴・土山祐之「近江国柏木御厨故地現地調査報告Ⅰ—甲賀市水口町植地区における聞き書き集—」（『淡海文化財論叢』16、2024年）

渡邊浩貴・佐野正晴・水谷光希・鶴飼爽一郎「近江国柏木御厨故地現地調査報告Ⅱ—甲賀市水口町酒人地区における聞き書き集—」（『淡海文化財論叢』17、2025年）

『貴生川遺跡発掘調査報告書』（甲賀市教育委員会、2017年）